

## 小説家の四季 二〇一七年 夏

佐藤正午

三年前『鳩の撃退法』を書き上げたとき、それを書き始めたときからすると五キロほど落ちていた体重がいまだに戻らない。十分なインターバルをとらず(編集者に尻を叩かれて)次の『月の満ち欠け』に取りかかったせいだろうと推測している。去年その『月の満ち欠け』の第一稿を書き上げたとき、書き始めたときからするとさらに一、二キロ体重は落ちていた。昔から、身を削って長編小説をひとつ書き切るたび体重は五キロほど減る。今回一、二キロですんだのは、身の削り具合を加減したわけではなく、おそらくだが、もう僕の身体はこれ以上体重の減らしようがないくらい痩せ細っているからだろうと推測される。

この数年、ひとと会うたび挨拶代わりに「痩せたよね」とか「ご飯ちゃんと食べてる？」とか言われるのは慣れているのだが、先日、なじみの居酒屋でちびちび梅酒を飲みながら待ち人を守っていると、若い女将さんがそばへ来て、「正午さん、いま体重何キロ？」と遠慮なしに聞くので、月に一度通院しているクリニックで計測済みの今月の数値を教えると、「うわ、すごっ」と驚いて、そこへ

通りかかったバイトの女の子も加わり、話題はいつしかスリムな芸能人との比較に移って、女の子がスマホで調べて言うには、僕の身長と体重の比率はAKB48の、ではなく僕がよく知らない、AKBとは別のアルファベット三文字のアイドルグループの、何とかという十代の少女のプロポーションとほぼ一緒で「奇跡的！」かつ「めっちゃウケる！」ということである。

その少女が中学生なのか高校生なのかは知らないが、もうじき六十二になる小説家としては、アイドルグループのメンバーとプロポーションが奇跡的に一緒でめっちゃウケられても、さほど有り難みも感じないし、「へえ」ととりあえず相槌を打って、あと、どう対応してよいかわからず口ごもるしかなかった。

その話を掘り下げたいわけではない。

そのことから連想して、というか強引に話を持っていく感じで思い出したのは、今年の春先、まだ『月の満ち欠け』の再校ゲラを読み込んでいる時期に、担当の編集者から電話がかかって、書店(さん)向けの宣伝用に、本の出版に先立ってプロフィールを作成することになりましたと、まるで「バンザイして喜べ」みたいな口吻で告げられたときのこと、それはもちろん、出版社が小説家の本を売ろうとあの手この手を尽くしてくれるのは頼もしいけれど、プロフィールと呼ばれる宣伝用の簡易本は『鳩の撃退法』でも作ってもらった記憶があったので、ああそう、と何の気なしに答えると、即座に返っ

てきた編集者の言葉が、

「ウンベルト・エーコ以来なんですよ！」

というものだった。

え？と聞き返すほかなかった。

「うちでプルーフを作ったのは、前回がウンベルト・エーコの本を出したとき、それ以来なんですよ、つまりそのくらい『月の満ち欠け』の売り込みには熱が入っていると、かいつまんでいえば、そういうことです」

「へえ」

「ウンベルト・エーコですよ？ わかりますよね」

「うん」

「じゃあ、バンザイしてください」

バンザイしてくださいというのは編集者が実際口にした言葉ではなく、あくまで僕が汲み取ったニユアンスだが、電話を切ったあとで、その「ウンベルト・エーコ以来」にどのくらいの有り難みを感じていいものか心許なかったので、スマホでググって見たところ、映画『薔薇の名前』の原作者という経歴に目が止まった。ああ、そうか、それでウンベルト・エーコの名前に聞き覚えがあったのかと僕は思った。映画は昔見た。原作本は読んでいない。けどストーリーはぼんやり憶えているから読んだことにして、こんど編集者がその話題を持ち出したら、こう言おう。あの『薔薇の名前』のウンベ

ルト・エーコだね、それ以来のプルーフ作成だね？ とても光栄なことと思うよ。

で『月の満ち欠け』の刊行が間近にせまった頃、おなじ編集者から電話がかかってきた。彼はこう言った。プルーフを読んだ書店さんからサイン会のお誘いをいただいています。もちろん喜んで引き受ける、と返事をしてかまいませんね？

え？とこのときも聞き返すほかなかった。

編集者は、このときは、短いため息をついた。

「え？って何ですか。新刊の小説と一緒に盛り上げようと、書店さんがサイン会やりましょうと提案してくれてるんですよ。なのに小説家が、え？って驚いてどうするんですか」

え？と僕がこのとき声をあげたのは、驚いたからではなくちよつとだけ戸惑っていたからである。サイン会について思うところを、この「小説家の四季」の連載で二年ほど前、率直に書いたことがある。僕の「サイン会観」というものを披露して、それから一般のサイン会とは別物の、サイン会の「理想型」にも触れた。読んでもらえばわかると思うが、僕はすくなくともサイン会を提案されて目を輝かせるようなタイプの小説家ではないし、あと、本を出せば必ずサイン会の依頼が押し寄せるような、書店(さん)から調法がられるタイプの小説家でもない——ちなみにそれらの文章は去年出たエッセイ集『小説家の四季』に収録されている。そしてそのエッセイ集を編んだのも『月の満ち欠け』とおなじ編集者である。

ということは、電話をかけてきた彼は、担当する小説家のサイン会に対する基本姿勢(かくべつ積

極的ではない)や、小説家が温めているサイン会の理想型(たとえ頼まれなくても自発的に、形式無視で、やるときはやる)を、じつは誰よりも知り抜いている人物なのである。その彼が、しれっと、依頼さえあれば喜んで引き受けますよね? 決まりですね? とまるで自分が編集した本の中で小説家を書いている文章など一顧だにしないかのような、このさい全部忘れたふり、みたいな口ぶりで電話をかけてくる、その言動に戸惑ったわけである。彼はたまたみかける。

「いいですね? 喜んで、と先方へ返事しても」

もちろん、編集者の言動への戸惑いと、小説家としての正しいふるまいとは分けて考えるべきだろう。僕の思い描くサイン会の「理想型」と、「現実」のサイン会への実践対応とはまた別の話だ。そこからへの塩梅についても、エッセイ集『小説家の四季』をお読みになれば納得していただけたと思う。で、僕は答える。

「そりゃまあ、結局、喜んで、という返事にはなるけどさ」

「なるけど、何ですか」

「ちよっとあいだが抜けてないか。もうワンクッション必要じゃないか、小説家と担当編集者との、内々の会話においては?」

「正午さん」口調があらたまった。「このあいだ私、申し上げましたが、お忘れでしょうか。営業部ともども『月の満ち欠け』の売り込みにいかに力を注いでいるか、繰り返しますが今回作成した『月の満ち欠け』のプルーフは……」

「……わかってるよ、それは有り難いと思ってるよ」

「ウンベルト・エーコ以来なんですよ!」

「知ってるって、あのウンベルト・エーコだろ? 『薔薇の名前』だよな? それ以来のプルーフ作成なんだよね? 僕だってウンベルト・エーコくらい読んでるよ。だからとても光栄に思うよ」

「正午さん」

「なに」

「『薔薇の名前』は、他社から出た本です」

「……ああそつ」

サイン会は『月の満ち欠け』刊行後まもなく、地元佐世保とそれから長崎の書店(さん)で二回おこなわれた。

なつ。

ではその二回おこなわれたサイン会の模様を、ここで僕は書くべきではないだろうか。書くべきだろう。というか小説家の身のまわりで持ちあがったその種の出来事を報告するために、この「小説家の四季」連載の場は用意されているはずだろう。そう考えて、サイン会当日の出来事を忘れないようこまごましたメモまで取っていたのだが、ことごとく無駄になった。なぜかというと、岩波書店発行

の月刊誌、発刊から八十年(一)の歴史あるあの「凶書」の六月号、編集後記の頁にあたる、あの「こぼればなし」欄に、

去る四月、佐世保と長崎を訪ねました。佐藤正午さんの書き下ろし小説『月の満ち欠け』のサイン会のためです。

と、おっとりした書き出しで、一頁まるまる使って、佐世保と長崎でのサイン会の模様が紹介されてしまったからである。

僕はそれをじっくり最後まで読んだあとで、まず、小説家のお株を奪うという表現を思いつき、いやいや、そうじゃないな、そんな生易しい表現じゃすまないな、とその感想を打ち消して、こう思い直した。これは、小説家の仕事を奪う、というべきだな。

普段めつたに外に出ることもない、生来の出不精というか引きこもり気質のうえに、小説を書くことで体重を減らし、減らし続けて痩せ細って、いまやアイドルグループの少女とおなじプロポーションの、体力にも不安を抱える小説家が、みすばらしい外見を人目にさらす恥を忍んで、あえて人前に出て(二回も!)サイン会をやり遂げたというのに、そのめつたにないハレの出来事を自ら文章にして報告する前に、他人に書かれてしまう。横から仕事をかっ攫われてしまう。じゃあ、僕はここで何を書けばいいのかわかるか?

もう少し「こぼればなし」から引用する。

佐世保は佐藤さんが居を構えておられる街。地元での初のサイン会ということもあって、(中略) たくさんの方ファンの方が来場されました。また、佐藤さんの高校の同窓生のみなさんや、行きつけのお店のスタッフといった顔なじみの姿も。

僕にできるのは重箱の隅をつつくことである。

右の引用文における「佐藤さんの高校の同窓生のみなさん」が、文の後半の「といった顔なじみの姿も」と結びつけて読まれるのではないかと心配がある。これを読んだ人はきつと、佐世保は地方の小さな街だし、高校も一つか二つしかなくて、卒業から何十年経っても同窓生どうしのつきあいは盛んなだろう、そういうお友達が何十人もサイン会に詰めかけたんだろう、と想像するに違いないが、それは実情とは違う、まったく懸け離れている、という点をまずもって指摘しておきたい。そのうえで、本稿冒頭の、僕がなじみの居酒屋で梅酒をちびちび飲みながら待ち人を待っている、という伏線を思い出ししてもらい、そこから再びサイン会に来てくれた高校の同窓生(ぜんぜん顔なじみではない)の話題に立ち戻る、という展開をいま準備しているのだが、ここまですでに長くなったので続きは次回にゆずる。

またか?

「こんどもまたサイン会の話が二回も三回も続くのか？」と『小説家の四季』をすでにお読みの方は思われるだろうが、その予定である。なにしろ今回は小説家として書くべき話題を編集者にかつ攫われたので、その文章の、重箱の隅をつつくところから始めて、あとは、仕事を盗られた被害者として書き足りない気分を次回埋めることにする。